

地域に根差す、足利赤十字病院の広報誌

# 風流鯨

— かせながすくじら —

ご自由にお持ち下さい  
Take Free

2024.4 Vol.45

- 副院長退任挨拶
- JCI認証更新
- 能登半島地震における当院の対応



Organization Accredited  
by Joint Commission International



日本医療機能評価機構

## TOPICS

- 令和6年度 入社式
- 節分鎧年越
- 第3回地域連携研修会「サイバーナイフ治療」
- ハートクロスフェスタ
- コメディカルの豆知識
- 栄養課の窓
- 理念・基本方針

# 退任のご挨拶



副院長  
平野 景太

長い間お世話になり  
ありがとうございました。

20年に渡り慈恵医大腎臓・高血圧内科で臨床、研究、教育の研鑽を積み、教授から足利日赤で腎臓内科を作ってこい、と言われて10年が経ちました。腎臓内科を作るなんて自分にできるだろうか、いや、勉強は実践してこそ価値がある、と自問して日々が過ぎていきました。

診療面では、腎臓内科で腎生検により腎臓病を診断することを啓蒙しました。診断の次は治療です。多くの患者さんのご理解、ご協力とともに、観察研究や治験などで腎炎の新しい治療を国際誌に報告しました。透析においても、血液透析、腹膜透析、併用透析、腎移植の連携など多くの医療における質の改善活動を展開しました。これも病棟スタッフ、コメディカルの支えのお陰です。こういったチーム医療には共通の目標が必要です。それは、患者さんの良好な予後を目指したい、という思いでした。私の退職に伴い、短期、腎臓内科は休止しますが、近々、次世代の腎臓内科が再興すると確信しております。

病院の管理面では、副院長、医療安全推進室長、医局長などいろいろな役職を経験させていただきました。多様な経歴を持ったスタッフと交わり、病院の国際的機能評価資格(JCI)の更新などを獲得していくうえで、スタッフ皆の「病院を良くしたい」という思いに触れることができたのは、この上ない幸せでした。このような思いは普遍的なものです。今後も結束し、絆を大切にさらに良い病院となるよう願っております。本当に長い間お世話になりありがとうございました。



# JCIの認証を更新しました

[Joint Commission International: 国際的病院機能評価機構]

足利赤十字病院は、2024年2月10日(土)付でJCI(Joint Commission International)の認証を更新しました。2015年2月に国内9番目、栃木県内および全国の赤十字病院で初めてこの認証を取得してから3度目の更新となります。

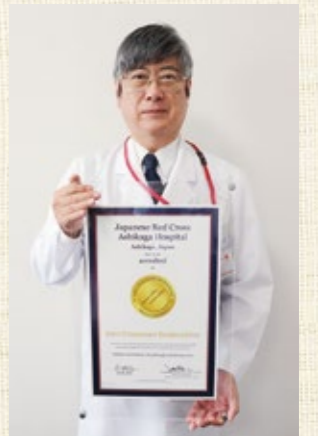
審査後の  
集合写真▶



## JCI(Joint Commission International)とは

JCIは米国シカゴに本部を置く国際的な医療機能評価機構です。第三者の視点から医療機関を客観的に評価し、一定基準に達した施設を認証します。しかしながら、その評価基準は世界で最も厳しいと言われており、さらに、3年ごとに必要となる更新審査の都度に要求事項が難しくなるため、取得することも維持することも非常に難しい認証です。JCIの認証は、患者安全や医療の質などの点において国際基準を満たす医療機関の証であり、海外では医療機関を選ぶ際の基準にもなっています。

現在、全世界で1,000以上の医療施設が認証を取得しており、日本国内では、亀田総合病院(千葉県)、NTT東日本関東病院(東京都)、聖路加国際病院(東京都)、湘南鎌倉総合病院(神奈川県)、聖隷浜松病院(静岡県)、済生会熊本病院(熊本県)、藤田医科大学病院(愛知)など28の施設が認証を取得しています。(2024年4月1日現在)

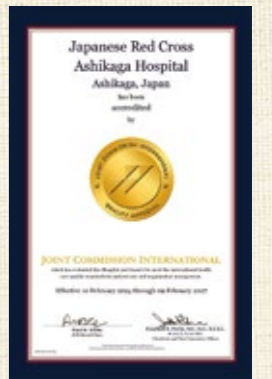


認定証を掲げる室久院長

## 更新審査の概要

審査は2月5日(月)～9日(金)の5日間に渡って実施されました。審査員は3名で、全員が外国人であるため会話は全て通訳を介します。また、コロナ禍だった3年前の審査ではWebによるリモート審査が併用されましたが、今回は従来どおりの全面実地審査となりました。

JCIの審査において特に重要視されるのは、対象となる医療機関において患者さんの安全が担保されているか、高品質な医療が提供されているか、継続的な改善の仕組みがあるか、という点です。審査員は5日間をかけて院内全ての場所に赴き、目視での確認や職員への質問、カルテ・文書の確認等によって、1,114個の項目を厳正に審査しました。困難な部分も多い審査となりましたが、全職員が日頃の努力の成果を発揮した結果、無事に認証を更新することができました。



JCIの認定証

## 患者安全と医療の質の向上を推進する活動

JCIに関連する取り組みは全て、患者安全や医療の質の向上を目的としています。例えば患者さんに対して、診療の都度「氏名フルネーム」と「生年月日」を確認させていただくこともその一つです。当初はご面倒をおかけすることもありましたが、今では多くの方が自発的にご協力くださるようになりました。この取り組みが病院に定着したことは、患者さんを取り間違えるリスクを減らし、診療の安全性を高めることに繋がっています。

患者さんへ安全で質の高い医療を提供するためには、我々医療従事者が努力し続けることはもちろん、このような取り組みを通して、患者の皆さまと一緒に安全に関する文化を醸成していくことも重要です。当院では患者安全と医療の質を向上させるために、引き続き様々な活動に取り組んで参ります。



# 能登半島地震における当院の対応

## DMAT

救命救急センター長  
菊池 広子

### DMATとは

大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期(おおむね48時間以内)から活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームです。

当院は災害派遣医療チームDMAT研修に積極的に参加し、日頃から有事に備えています。令和6年能登半島地震では、医師、看護師、薬剤師、救急救命士各1名で結成したDMAT隊を1月11日から病院救急車と共に被災地に派遣しました。1月12日に公立能登総合病院内DMAT活動拠点本部経由で穴水町保健医療福祉調整本部(穴水町保健センター内)へ移動しましたが、能登半島移動中は使用できるトイレはなく、道路の損傷などを避けた迂回や渋滞で時間を要しました。穴水町保健医療福祉調整本部では「組織の垣根を越えて穴水町の医療関係者を支える」という活動ポリシーの下、隣接する公立穴水総合病院の病院支援を1月12日～17日まで行いました。こちらの病院は職員の多くが帰宅できず、病院に隣接する避難所で生活をしながら勤務を継続しているとのことでした。病院は部分的損傷があるものの建物、電気は使用可能でしたが、上下水道が使用できず、入院患者さんの転院調整が必要な状況でした。我々の業務は救急外来診療、患者さんの転送が主でしたが、大きな問題なく任務を終了し1月18日帰院しました。派遣中は行く先々で暖かいお言葉をかけていただき励みになりました。ありがとうございました。

## CoT

消化器内科部長  
鈴木 統裕

### CoTとは

被災地における被災状況の情報収集、医療活動に対し専門的な助言、他の医療救護機関との連携・調整を行う、救護に関する専門的な知識を有するチームです。

2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」において、日赤救護班の活動を報告させていただきます。当院から1月末に第一次救護班が、2月には第2次救護班が派遣されており、私は2月に救護班コーディネーターチーム(以下CoT)として派遣要請を受け2月5日～9日まで珠洲市健康増進センターにて活動を行ってまいりました。

日赤の災害救護活動の歴史は、1888年(明治21年)に起きた福島県磐梯山噴火災害にまで遡ります。当時の皇后陛下(昭憲皇太后)からの後押しもあり、医師の派遣を決定しました。これが、日赤として最初の災害救護活動です。現在は、全国485班・約5千人(2022年4月1日現在)の救護班が、病院での業務を行いながら研修や訓練を通じて災害救護に必要な知識や技術を身に付け、発災時にいち早く駆け付けて救護活動ができるように体制を整えています。

今回の私が参加した救護班活動は当院では初となるCoTであり、CoTとは各救護班の活動をより円滑に、日本赤十字社リソースの有効活用を目的とした組織であり、各団体・部門との調整を行うチームのことです。災害時に必要となる人的資源・医療資源は限られており、それを有効活用するために、避難所や救護所にどの程度の医療ニーズが発生しているかを把握し、そのニーズを日赤石川県支部や石川県庁と報告・相談し、より被災者支援を円滑に行うように努めてまいりました。

CoTの活動期間内では、まだ上下水道が復旧しておらず、更に道路が少しずつ復旧してきている時期ではありましたが、救護活動も過酷な状況でありました。ですが、現地の市職員含め活動をされている方々は、御自身も被災者でありながら、懸命に地域復興に向けて努力をされており、その活躍を少しでも援助・協力できればと考えながら行動をまいりました。まだまだ復興には時間がかかるものとは思いますが、今後協力できることがあれば微力ではありますが、支援を継続できればと考えております。

最後に「令和6年能登半島地震」によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被害に遭われた方々とそのご家族に対しまして、謹んでお見舞いを申し上げます。

## 第一次救護班

外科副部長  
岸田 憲弘

### 救護班とは

病院での業務を行いながら、研修や訓練を通じて、災害救護に必要な知識や技術を身に付け、発災時にいち早く駆け付けて救護活動ができるように体制を整えています。

## 第二次救護班

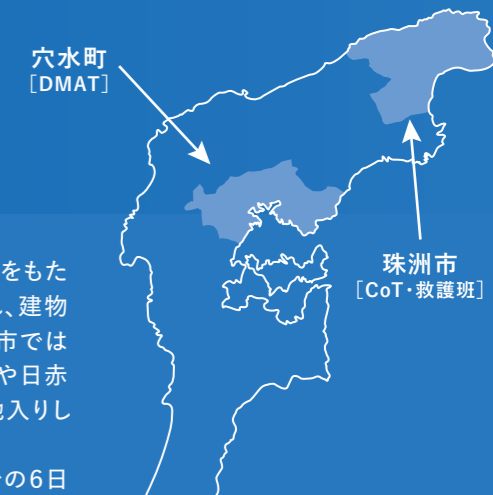
内科医師  
池田 拓海

2024年元日に能登半島地震が発生し甚大な被害をもたらしました。阪神・淡路大震災に匹敵する規模とされ、建物倒壊・津波・地盤隆起・液状化による被害、また輪島市では大規模な火災も発生しました。発災当初よりDMATや日赤救護班、自衛隊、消防をはじめ、数多くの団体が現地入りして被災地での支援を行いました。

当院からもDMATに続き1月26日から31日までの6日間、救護班8名(医師1名・看護師3名・薬剤師1名・臨床検査技師1名・言語聴覚士1名・業務調整員1名)が石川県珠洲市に派遣されました。被災地では路面状態が悪く雪の影響もあり、片道約12時間の道程の後に珠洲市内の避難所の巡回や救護所での診療を行いました。避難所での生活を余儀なくされ、また断水が増続していることから排泄や入浴・洗濯などに支障がある状態でしたが、その中でも復興に向けて笑顔で協力し合い、頑張っておられる被災者の方々が大変印象的でした。我々はそれぞれの専門性を活かしながら、短期間ではありましたがチームとして被災者の方々に寄り添えたのではないかと思います。一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

能登半島地震災害救護の救護班第2班として、2024年2月14日(水)～19日(月)に活動しました。珠洲市までの道なりも高速道路が半壊し、すぐ崖の近くを通ったり、像が崩れていたり災害の規模の大きさを物語っていました。珠洲市内でもほとんどの家々はまだ壊れ、少しでも車のスピードを上げようものなら飛び跳ねてしまい、復旧にはまだ時間がかかりそうです。いつまで避難所にいられるかわからないという不安、集団生活による感染症、深部静脈血栓症や褥瘡などの災害特有の病気、持病の治療の継続といったさまざまな問題が山積みであり、そのような問題点は日々変化しているようでした。今、何が必要とされているのかを考えることが重要で、継続した救護のためには普段の医療行為に加え、精神的なアプローチ、リハビリ、保健師の目線など多職種で力を合わせる大切であると感じました。

最後になりますが、今回救護班という職務を任せていただき、ありがとうございました。看護師の方々、薬剤師の方々、主事の方々、支部の方々、留守中の病院内のサポートをくださった方々のおかげで、無事に救護活動から帰院することができました。いつもありがとうございます。



## 令和6年度 入社式を実施

桜が満開を迎え、春らしい陽気の中で、令和6年度の入社式が執り行われました。今年度は95名の新しい職員を迎えることができ、真新しい白衣に身を包んだ新入職員たちは、強い決意を胸に新たな1歩を踏み出しました。

当日、室久院長より一人ひとりに辞令が交付され、式辞においては「同僚や先輩職員をはじめ、患者や家族と信頼関係を築き、病院理念を達成するための努力を継続してください」と激励の言葉が送られました。

地域の皆さま、関係機関の皆さま、令和6年度新入職員に温かいご指導とご鞭撻をどうぞよろしくお願いいたします。



## 節分鎧年越に参加

毎年2月3日に開催されている足利市の伝統行事『節分鎧年越』に当院の臨床研修医が参加しました。足利の伝統と文化を感じてもらい、地域に根差した医療人を育成するために、1年目の臨床研修医が参加しています。

当日は、臨床研修医10名が勇壮な鎧姿で足利の町を練り歩き、最後は鍔阿寺で追儺式(豆まき)が行われました。参加した研修医は、「寒空の下、慣れない装いで歩くことに不安がありましたが、沿道の方の温かい声援に励まされました。足利の伝統行事に参加でき、心から光栄に感じています。身を引き締めて、地域の皆様により良い医療の提供ができるよう、更に精進していきたいです」と話しました。

今後も地域との交流活動を積極的に行って参ります。



## 第3回 地域連携研修会「サイバーナイフ治療」

2024年2月21日(水)19:00～足利赤十字病院講堂において、地域連携研修会を開催いたしました。

「サイバーナイフ治療」をテーマに放射線治療部 医師 塚本信宏シニアディレクター講師による講演会を実施しました。サイバーナイフとはロボット型放射線治療装置であり当院では2023年4月に導入しております。

サイバーナイフは定位照射が可能でピンポイントで腫瘍を狙い大線量を照射できることから高い治療効果が期待できます。かつ従来の放射線治療では効きにくかった悪性細胞を全滅できる可能性があります。ピンポイントで照射することから線量の集中性に優れており、近くに大切な臓器があっても副作用を心配せず治療できることも特徴です。

また、疼痛緩和や腫瘍縮小等目的とした緩和照射も行っており、従来の放射線治療に比べ1回～5回と少ない回数で行うことができ、何週間も通院する必要がありません。

このように高精度なサイバーナイフ治療が、これからのがん治療に大きな効果が期待できる貴重な講演でした。治療をご希望される患者さんは、まずかかりつけ医へご相談ください。かかりつけ医からのご紹介をもってサイバーナイフ治療適応可否等を判断いたします。



2024 足利赤十字病院 病院祭

# ハートクロスフェスタ

を開催します!

入場無料

病院祭「ハートクロスフェスタ」を開催します。地域の方々との交流を目的とし、今年で8回目の開催です。体験ブースやゲームコーナーなど老若男女問わず楽しめるイベントです。ご家族、ご友人とぜひご参加ください。

**日時** 5月11日(土) 10:00～14:00

**会場** 足利赤十字病院

**開催内容**

- ★高校生病院体験 ★救急法 ★幼児安全法 ★ちびっこ写真撮影
- ★看護師知りたい聞きたいコーナー ★手洗い体験 ★お薬相談 ★調剤体験
- ★放射線機器展示 ★検査用顕微鏡展示 ★運動機能測定 ★レーザークラフト体験
- ★とろみ付飲料体験 ★健康・栄養相談 ★救護車両展示
- ★能登半島地震災害救護活動展示 ★縁日ゲームコーナー 等

写真は過去の病院祭の様子

## コメディカルの豆知識

### 知っていますか？ 歩行補助具

高齢者の10～25%が転倒しており、そのうち約5%が骨折していると言われています。安全な歩行をするための1つの方法として歩行補助具の使用があります。歩行補助具とは、杖、歩行器、シルバーカー等の事です。

- **T字杖**：腕の力があり歩行バランスが比較的良い方向けです。
- **多点杖**：脚が3～4本に分かれていて接地面積が広く安定しています。  
T字杖よりも安定性を求める方、筋力が低下している方などに適した杖です。
- **歩行器**：杖に比べると安定性が高く、歩行が不安定な方に適しています。
- **シルバーカー**：足が弱い方の外出用として利用することが多いです。

※個人差があるため適切な歩行補助具の選定は理学療法士、作業療法士に相談しましょう。

おまけ

置き型手すり

歩行補助具ではありませんが当院で転倒予防の対策で使用している福祉用具の一つです。工事を必要とせず手すりを設置することができ、安全に立ち上がりたり歩くことが可能となります。

▲T字杖

▲多点杖

▲歩行器

# 栄養課の



# 私の郷土料理 をご紹介します

## 埼玉県の郷土料理「ゼリーフライ」をご紹介します!

ゼリーフライとは甘いゼリーを揚げているような名前ですが、実は **おから**がたくさん含まれた衣のないコロケのような揚げ物 で、小判型のため**銭フライ**と呼ばれていたものが、**ゼリーフライ**に変化したと言われています。

### おからの豆知識



●豆腐を作る際に、豆乳をしぼった後に残るもの。

●**食物繊維が豊富** **なんとゴボウの約2倍!**

おから100g中 食物繊維総量11.5g(不溶性食物繊維11.1g、水溶性食物繊維0.4g)

不溶性食物繊維とは… **水分を吸収し便の量を増やし、便通を整える優れたもの**です!



**食物繊維目標量**  
成人男性 約20g以上  
成人女性 約18g以上

### ゼリーフライ



画像提供元:行田市

#### 材料[2人前:4個分]

- おから…………… 70g
- じゃがいも…………… 60g
- 小麦粉…………… 8g
- 卵…………… 1/5個
- にんじん…………… 10g
- 玉ねぎ…………… 15g
- 塩…………… 少々
- こしょう…………… 少々
- 油…………… 適量
- ウスターソース… 適量
- 中濃ソース…………… 適量

#### 作り方

レシピ参照元:北埼玉の伝承料理

- 1 じゃがいもは皮ごとふかしてから皮を除きつぶす。
- 2 野菜はみじん切りにする。
- 3 おからをこねて空気を抜き、じゃがいも、野菜、小麦粉、卵、塩、こしょうを加えて混ぜる。
- 4 小判型に形を整えて、160°Cの油できつね色になるまで揚げる。
- 5 ウスターソースと中濃ソースを3対2の割合で混ぜ、ゼリーフライをくぐらせて出来上がり。

管理栄養士 中山 恭子

■栄養成分(1人前:2個分)	エネルギー …… 133kcal	たんぱく質 …… 3.8g	脂質 …… 6.9g
	炭水化物 …… 17.7g	食物繊維総量 …… 7.1g	食塩相当量 …… 1.0g

## 理 念

患者の皆さまがかかってよかった  
職員のひとりひとりが勤めてよかったと言える病院を創ります。

The well-being of ours is dedicated to establishing a hospital,  
where our patients feel comfortable to have treatment and care,  
where each individual staff is happy to work for.

## 基本方針

われわれ全職員は基本方針を守ります。

- 1 『人道と博愛』の赤十字精神を心に、患者さま中心の医療を行います。
- 2 急性期病院としての機能と役割を、高い水準で発揮できるよう、日々励みます。
- 3 地域における基幹病院として、地域医療機関との連携を深め、住民の健康増進に努めます。

